



想う女 1972-3 (アフレスコ・ストラッポ)

# Melody of the Firmament

Journal of Koji Kinutani Tenku Art Museum

## 天空の調べ (絹谷幸二 天空美術館 機関誌)

2020.04

vol.2

### アトリエの父

絹谷幸二 天空美術館 キュレーター 絹谷美帆

家での父は面白く大らかな人だ。時に厳しくもあるが基本的には常に楽しい事を考え、明るくポジティブであれと口にする。しかし一方で、物事を多面的にとらえる両眼の目を持つ大切さを、絵を通して教えてくれる。

普段の父の生活は、常に絵を描いているか、忙しく絵画の審査や会議で日本中飛び回っているかのどちらかだ。家では誰よりも早起きて、明け方6時にはアトリエで絵を描いている。キッチンに戻り朝食を食べ終わると、すぐコーヒー片手に2階のアトリエへと向かう。それは365日昔から変わる事のない風景。来客や電話などの取次でアトリエをのぞくと、いつもの絵の具がついた作業着姿で、目をまん丸くしながら、時には遠くを見つめるような細目をし、ずっとキャンバスの画面とにらめっこしている。いつの時代も朝の明るい自然光と陽気なラジオがアトリエには流れている。

50年以上父は毎日欠かすことなく絵を描いている。滑らかな手つきで筆を走らせた動作はまるで音楽のようにリズムカルで、様々な色彩を作りだし、運ばれ、作品は描かれていく。その過程は日々鍛錬された精神が無意識に父の内側の深い想いを表現しているのだろう。日々の生活の喜びの中から、そして苦しみの中から、まさに芸術が生まれている瞬間なのだと思う。

生きること生活することが芸術である父にとって、“芸術は人生である”。溢れ出す想像力を色彩にのせ、エネルギーを爆発させ、絵で人を元気にする。

私は芸術家ではないので芸術が人生ではないが、できるならば少しでも「人生はなんて芸術的なんだろう！」と思えるような“人生は芸術である”という日々を送りたいと思っている。



来館者10万人突破イベントにて父絹谷幸二、内田隆 館長と



リド島にて 1972 (アフレスコ・ストラッポ)

か。そしてそれを裏付けるかのように、ブルーの空の下地には薄いピンク色が施されている。現在の絹谷スタイルとは大きく異なるが、その色彩感覚や部分的に引かれた輪郭線からは、作者の巧さやセンスを考察できる。しかし全体的な印象としては、どこか白昼夢のような淡い色彩で長閑な時間が演出され、サインが入っているため完成作ではあるのだが、ラフ画やスケッチのようにも捉えることができ、未完成作品のようにも感じられる。

だが、この「リド島にて」はまぎれもなく、1970年代以降の絹谷スタイルを象徴する自由奔放に画面を駆け抜ける輪郭線の胎動がうかがえる初期の重要な作品と位置付けることができるのである。今回の作品紹介では、その制作背景をたどりながら、この作品が持つ稀有な特徴や魅力について紐解いていく。

「リド島にて」が描かれる以前、つまり東京藝術大学時代の絹谷の作品は、現在のスタイルとは大きく異なっていた。卒業制作展で大橋賞を受賞した「蒼の間隙」や同年に描かれ独立賞を受賞した「諧音の詐術(トリック)」に代表されるように、モノクローム基調で人体や室内空間をモチーフとした画面構成で、単色画独特のグラデーション効果が重厚な趣を生み、深い精神性を感じさせるものであった。混沌とした空間の中から形態を探り出していく描法で、偶然性や画家の迷いやためらいが如実にうかがえる流動的な制作であったと言える。この時代の単色絵画は高評価を受け、1968年には独立美術協会の会員に推挙されている。だが、イタリアでの修業経験を機にその様式は大きく変貌を遂げ、今日の絹谷スタイルへ転換していく。

1971年、東京藝術大学の副手を務めていた絹谷はヴェネツィア・アカデミアのブルーノ・サエッティ教授に招待を受け、アフレスコ古典技法を学ぶべくヴェネツィアへ留学。当時、周囲の若手作家の多くはニューヨークを中心とした現代アートへ関心を寄せていたが、絹谷は大学3年次に法隆寺金堂焼失壁画と出会い、壁画独自の存在感と訴求力に魅了され、“忘れ去られた技術や感性の中にこそ、次の創造に繋がる道がある”と信じ、迷うことなく古都イタリアを選んだのである。はじめてイタリアに渡った当時のことを絹谷は「空気を吸い込んだとたん、それまでの私を束縛してきた日本的なものが飛び散って、赤でも青でも、どんなイタリアの光彩も受け入れられると思った。(絹谷幸二著『自伝』より)」と語っている。美味しい食事とワイン、そして何より明るく陽気に歌い、人を愛し、敬虔な祈りの心をもって暮らすイタリア人の生活が絹谷の人生と芸術に非常に大きな影響を与え、今日の豊かな色彩とエネルギーに満ち溢れた絹谷スタイルの基盤になったのである。

そしてその契機として挙げられるのが、自由奔放に画面を駆け抜ける輪郭線の修得である。

絹谷が輪郭線へ意識を傾けはじめたのは、ヴェネツィア留学時のアフレスコ模写を通じた古典壁画研究がきっかけである。アフレスコ古典壁画の制作過程は前回(Melody of Firmament vol.1)お伝えしたが、素材の性質上、制作に際しては時間的な制約を伴う。つまり短時間での制作が求められるのである。そして、短時間で作品を完成させるためには何を描くのかを予め明確にすることが必須となり、描く前には下図の準備を行い、輪郭線を決定しておく必要があった。即ち、アフレスコ古典壁画の制作において、輪郭線を描く事への意識は不可避であったと言える。この修業時代(1971~72年)に絹谷は、イタリア・ルネッサンス黎明期の画家ジョットやピエロ・デラ・フランチェスカのアフレスコ模写作品を残している。こうした古典壁画の様式を倣う実践の中で、そのプロセスを体得し、絵画における輪郭線の重要性を認識していくのであった。そしてさらに、この厳格な模写実践の反動として描かれた自由制作でのイメージ開放とともに、その輪郭線はさらに流動的でリズムカルなものとなり、自立した相貌へと昇華された。こうして流麗且つ緻密に引かれ、作品画面全体を総括する絹谷の輪郭線は生まれたのである。[1]

そして同時に、その輪郭線は作品の色彩へも大きく関連していく。人間の情感までも緻密に表わし確固たる意志で描かれた輪郭線の存在は、制作時のためらいや迷いを払拭し、絹谷の記憶に蓄積された豊かな原色表現を解放させたのである。[2] 今日の絹谷芸術を印象づける“豊麗な色彩”はこうして誕生したのであった。

## 作品紹介「リド島にて」 On the Lido in Venice

絹谷幸二 天空美術館  
アシスタントキュレーター 高橋暁生

リド島(Lido di Venezia)はイタリア北東部ヴェネツィアの南に浮かぶ細長い島で、ヴェネツィア国際映画祭の開催地としても知られている。また、バカンスシーズンになるとヨーロッパから多くの人が訪れるリゾート地である。今回ご紹介する「リド島にて」(On the Lido in Venice)は1972年、絹谷がイタリアに留学して間もない頃、画業の合間にアサリ採りを体験したりリド島での遊興のひとつが描かれた作品である。ぼんやりと晴れた日、穏やかな波音を聴きながら、カラフルなパラソルの下で横たわる数名の人物が描かれている。砂浜にはレジャーシートが敷かれ、パラソルの影から推測すると時間は朝方か夕暮れであろう



諧音の詐術(トリック) 1966 (油彩)

「リド島にて」は、まさに絹谷スタイルの転換期とも言えるこの修業時代の自由制作として描かれた作品である。こうした背景と照らし合わせて作品を考察すると、力なく横たわった人体表現がモチーフとして描かれている点、全体として静肅な空間が演出されているところは東京藝術大学時代の油彩画の共通点としてあげられるであろう。だがその反面、色彩は淡色ながらこれまでのモノクローム基調からの脱却、そして鮮やかな色彩への兆しを捉えることができる。そして、特にその輪郭線からは、先述の通り模写実践で繰り返した緻密で厳粛な制作からの大きな反動が見受けられる。流れるように自由奔放に、鼻歌を歌いながら、しかし部分的には何かを確信したかのように力強く描かれている。そこからは、開放されたイメージがたゆたう中で当時の絹谷が見た一瞬の閃き、まだ見ぬ創造へ期待感、そして描くことへの喜びなど、さまざまな感情の断片を読み解くことができないだろうか。つまり、絹谷スタイルが大きく転換し確立されていく時期ゆえの刹那的な特徴が、この作品から見てとることができると私は考える。

またこの作品の特異性はそれだけではなく、私が最も興味深く感じる点は“輪郭線と色彩が共生（共存ではなく）している”ことである。“共生”とはつまり、輪郭線、色彩ともにどちらか一方が欠けると成立しないという意味である。例えばこの作品をグレースケールで見ると、魅力は大きく薄れ、その輪郭線も意味合いを失っていく。そして、その逆も然りである。それはまるで、カンツォーネの曲に歌詞が溶け合うように、色彩と輪郭線が絶妙なバランスで調和しており、イメージ世界を開放して描いた色彩のマッサヘリズミカルな輪郭線を描き込むことで、絵画としての命が吹き込まれているようである。これは常に新しい表現の可能性を探り進化を重ねる多彩な絹谷スタイルの中でも稀な事例であると言える。

私がこの作品と出会った当初、どこか未完成の美というものを感じたことも、この“共生”に起因しているかもしれない。つまり、確固たるスタイルの開花間近で完成度は高いものの、最後の一手が未完成なスタイルであったからこそ、その輪郭線と色彩は相補的に溶け合い、美しい調和を成したのではないだろうか。その美しい調和は、他の年代の絹谷作品と比べるといささか特質的と言えるが、そこからは将来の確信を予期させる瑞々しい魅力を感じる事が出来る。さらに付け加えると、未完成なスタイルであったが故に起きた奇跡的な調和は、絹谷自身にとっても意図せぬものであり、その調和を歓迎し筆を置いたのではないだろうかと推測している。

このように、今回ご紹介した「リド島にて」には、多様な絹谷スタイルの中でも希有な特徴と魅力を備える作品と私は考える。一見、白昼夢のようなおぼろげなイメージと捉えることもできるが、丁寧に考察を進めると、故きを温ね新しきを知る若手アフレスコ画家が創造したアカデミックとモダンの狭間にある先鋭的な挑戦のプロセス、またその後、華々しいキャリアを飾る絹谷芸術が産声を上げるまさにその瞬間を垣間見ることができるのである。

[1] 絹谷はこのイタリア留学中に、国立ヴェネツィア東洋美術館を何度も訪れている。それは肉筆浮世絵から洗練された日本の“線の文化”を学び、アフレスコ古典壁画の研究と同様、その原点となる技術や感性を知ることで新しい表現の糧とするためであった。このように東西の美術史に深い関心を抱き“色彩の文化”である西洋と“線の文化”である東洋を双眼で捉えることが、絹谷芸術の原点となっている。

[2] 絹谷の線は黒一色であり、また肥瘦によって性格を変える線でもない。つまり、画面全体を総括する線は、画面のすみずみまで等価値を与えるのみならず、特に色彩そのものを均等な線と縁どることによって色彩の役柄を同等のものにしてしまうのである。色彩のヴァルールによる遠近や陰影による遠近は、この線によって一変し、画面の平面化は確固たるものとなる。ここに絹谷芸術の線の本質があるのである。

## ストラッポ技法のご紹介

ストラッポ技法とは壁に描かれたアフレスコの表面数ミリ（彩色層）だけを剥がし、カンバスへ移すことで移動可能な絵画作品へと仕上げる特殊技法である。今回の作品紹介で取り上げた「リド島にて」やアフレスコの傑作「アラベスク」もこの技法により、壁面から剥がし取られている。今回は、このストラッポ技法の手順について紹介したい。

ストラッポ技法ではまず描かれたアフレスコの表面に寒冷紗と呼ばれる厚手のガーゼを被せ、その上から隅々までしっかりと膠を塗る作業から始まる。膠は獣類の骨や皮などを煮詰めて作られる接着剤の役割をするもので、主に東洋画の顔料のメディウム（媒体）に使用される。ストラッポ技法はこの膠の固着力によって、アフレスコの表面を剥がすもので、膠の乾燥時間は季節にもよるが約12～24時間と言われており完全乾燥させた後、表面を覆う寒冷紗を剥がす。そうすると寒冷紗に接着したアフレスコの表面（彩色層）も一緒に剥がれ、この段階で普段見る事が出来ないアフレスコの裏側を見る事も出来る。その後、剥がし取ったアフレスコの裏面をよく伸ばしたのち非水溶性の接着剤を塗布し、新たに寒冷紗または麻布を覆い裏打ちし、最後に熱湯をかけて寒冷紗を取り除く作業（膠はお湯で溶けるため）を行う。乾燥したアフレスコの表面には固く透明なガラス膜が張っているので、寒冷紗を取り除くため熱湯をかけブラシでこすっても色は滲まない。

こうした作業を経て、アフレスコは展示場で陳列可能となる。従来、ストラッポ技法は教会、聖堂、礼拝堂などの壁画修復の応用として生み出された技法ではあるが、このストラッポ技法があるからこそ、アフレスコが現代アートとして美術館で展示され、多くの衆目を集めることができるようになるのである。

尚、この天空美術館にもストラッポ技法をつぶさに記録（『光ふる街』のストラッポ）したVTRは、絹谷幸二アトリエ前にて上映中である。



花飾りの少女 1981 (アフレスコ・ストラッポ)  
効果的に画面を引き締める輪郭線で描かれた1980年代の作品

館内では、ストラッポの実践をご紹介したVTRを上映中



# ICOM KYOTO 2019 開催の様子



公式ポスターの原画と絹谷氏

絹谷幸二氏が公式ポスターの原画を手掛けた、第25回 ICOM (International Council of Museums / 国際博物館会議) 京都大会が2019年9月1日～7日の期間で開催され、私たち天空美術館スタッフも絹谷幸二氏に同行し初日の開会式に参加した。ICOMとは博物館の発展に向け世界各国の博物館、専門家によって1946年に創設された国際的な機関である。今回の京都大会はICOMの総会としては初の日本開催となる記念すべき大会であり、世界各国の関係者が一同に会す華やかな雰囲気の中開会式は執り行われた。会期中は専門家たちによる討論や研修会が開催され、様々な情報交換や知識共有が図られた。開催6日目には関係者を対象としたエクスカージョン(体験型見学会)が実施され、58名のICOM参加者が天空美術館を訪れた。当日はサプライズで絹谷氏が自ら展示解説を行い、参加者は作者から話が聞けるという貴重な経験に大変喜んでいました。



各国の博物館関係者が来館したICOMエクスカージョンにて、自身の作品解説を行う絹谷氏

## JQA 地球環境世界児童画コンテストの様子

絹谷幸二氏が審査委員長を務め、昨年で第20回目を迎えた「JQA 地球環境世界児童画コンテスト」の受賞作33点が、絹谷幸二 天空美術館にて展示(2019年10月2日～11月1日)された。当コンテストは子どもたちが身近な自然から受けた感動を描き、地球環境について考える機会となることを願い開催されている。世界各国より出品され、大自然や生まれ育った街並み、好きな動物や大切な家族など様々なモチーフが素直な目線で色鮮やかに描かれていた。会期中には出品作者の子どもたちやそのご家族にもご来館頂き、楽しく充実した内容の展覧会となった。



ワークショップスペースで開催された展覧会の様子

## 美術館からのお知らせ

### 関西博物館連盟、全国美術館会議、日本博物館協会へ入会

昨年度からの活動において、絹谷幸二 天空美術館は関西博物館連盟、全国美術館会議、日本博物館協会へと順次入会をはたした。

まず関西博物館連盟へは、2019年4月18日に開催された「関西博物館連盟 第158回例会」にて加盟機関としての入会が承認された。関西博物館連盟とは、関西を中心とした地区にある博物館、美術館及びこれに相当する機関が連携協力して運営の充実向上と機関相互の新陸に資する事業を行い、併せて文化の展開に貢献することを目的として活動している連盟である。

次に全国美術館会議へは、2019年5月22日に札幌で開催された「第68回全国美術館会議総会」において新規正会員として承認された。全国美術館会議とは、現在、正会員:394館、個人会員:20名、賛助会員:52団体で構成され、美術館の使命の実現を支え、その活動を社会的にしっかり根付かせるため、総会、総会記念フォーラム、講演会、学芸員研修会、研究部会等を毎年開催し、その成果を会員館や広く美術関係者、また、一般の方々と共にしようとして活動している日本最大の美術館組織である。

そして2020年2月10日には日本全国の博物館施設で構成する日本博物館協会への入会が承認された。日本博物館協会とは、歴史博物館や郷土資料館、美術館、科学館、そして動物園、水族館、植物園など様々な博物館施設が存在するなか、設置者や館種を超えた横断的な博物館振興のための中枢機関として、昭和3年に発足された組織である。現在では、国や地方の博物館に関する動向を各館に伝える一方、博物館の現状・課題を集約し、行政や設置者に的確に訴えるとともに、改善に向けての調査研究、博物館職員の研修、全国博物館大会の開催など、様々な事業展開を行っている。

2020年4月15日発行 Melody of the Firmament / 天空の調べ vol.2

編集・発行 絹谷幸二 天空美術館

大阪市北区大淀中 1-1-30 梅田スカイビル タワーウエスト 27階